IBULIVE いぶりぶ

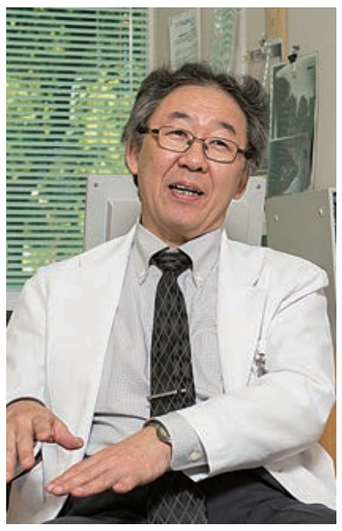
いぶり+Live

医療法人 社団 泌尿器科・血液透析
いぶり腎泌尿器科クリニック 広報誌 新年号 NO.32 季刊誌

坪院長の健康講座

前立腺癌について

＝後編＝



院長 坪　俊輔

今回は前立腺癌の治療について総論的にお話します。

前回述べましたように、前立腺の腫瘍マーカーであるＰＳＡの高値や直腸診などで前立腺癌を疑ったならば組織検査（経直腸的前立腺針生検など）を行い確定診断を得ます。前立腺癌でなかった場合でも以後ＰＳＡ検査などで定期的経過観察とし、前立腺癌だった症例では治療方針を決めるため、癌の広がり具合を調べる病期診断を行います。

前立腺癌の遠隔転移は特にリンパ節や骨に多く、ＣＴ・骨シンチグラフィー・ＭＲＩなどで周囲への浸潤の程度を含めて評価します。浸潤・転移のない限局癌が根治的治療の適応となります。癌の悪性度が軽く（高分化腺癌）で、なおかつ癌細胞の量が非常に少ない例では、近年治療をせずに経過をみていく〝ＰＳＡ監視療法〟がとられる事も多くなっています。

《これは剖検例で生涯何の臨床症状もなかった潜伏癌が50歳以上の日本人でも約25％いること、前立腺癌の進行は非常にゆっくりしている場合が多く、一般的には定期的に経過観察をし癌の状態が進み始めた時に治療を開始しても充分間に合う事などが根拠になっていると思われます。確定診断から一年後位にもう一度組織検査を行い、癌の悪性度や量に変化がないか再評価をするのが望ましいと考えます。》

限局癌では根治治療を目指します。合併症がなく、体力的にも問題のない70歳位以下の方に根治手術をお勧めするのが一般的かと思われます。（手術は開腹手術の他、腹腔鏡手術や最近ではロボット支援下腹腔鏡手術なども行われています）他に放射線治療や内分泌療法（前立腺癌は男性ホルモンを抑える事で進行の抑制が期待できる）があります。

いずれにしても前立腺癌に対する根治性、治療によるＱ・Ｏ・Ｌ（生活の質）の変化などに関し各々の治療法に長所短所があるのは当然で、個々の体力・合併症・年齢などを考慮して、症例ごとに治療法を検討すべきかと考えます。

診断時から浸潤・転移がある進行癌では根治手術の適応はなく、まず抗男性ホルモン剤による内分泌療法を行い、病状の推移によっては抗癌剤による化学療法を選択するのが通常の治療法かと思われます。

以上、前立腺癌の治療につき総論的にお話しました。

【表１】組織学的悪性度

前立腺癌
- ○高分化
- ○中分化
- ○低分化

→ より悪性

【表２】臨床病期

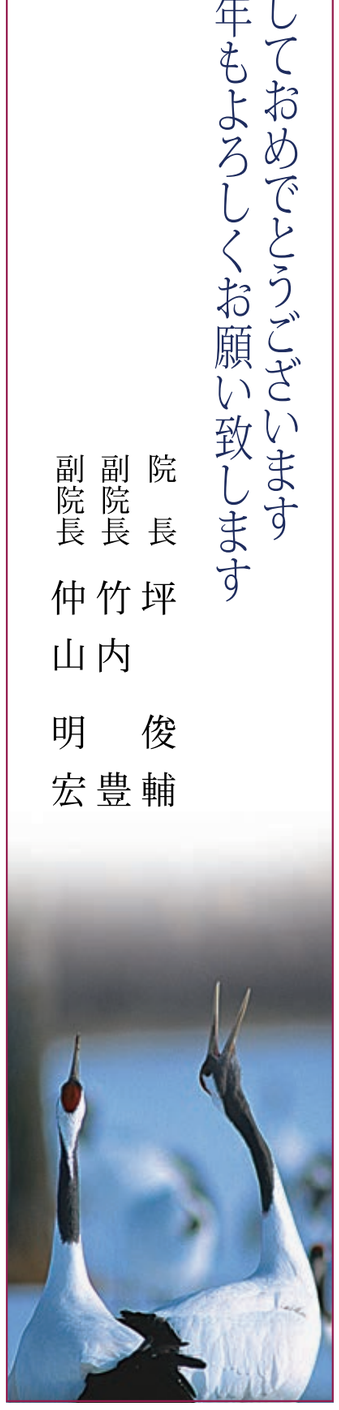
前立腺癌
- ○限局癌　周辺への浸潤および転移なし
- ○進行癌　周辺への浸潤およびリンパ節・骨などへの転移あり

【表３】前立腺癌の治療

《１》癌細胞の量が少なく、かつ高分化（悪性度が軽い）の場合
ＰＳＡ監視療法
＜無治療経過監視＞

《２》限局癌
①根治手術
②内分泌療法
③放射線治療

《３》進行癌
内分泌療法 → 化学療法
＜抗癌剤＞



あけましておめでとうございます
今年もよろしくお願い致します

院長　坪　俊輔
副院長　竹内　明
副院長　仲山　宏豊

北黄金町・高橋農場

広報誌「ＩＢＵＬＩＶＥ」に想う

平成16年７月に開院した当院がやっと落ち着き始めた同19年正月、院長から「そろそろ院内広報誌を創ったらどうか？」と言う提案がありました。

院長としては開院当初から発行を考えていた様ですが、私を始めスタッフもなかなか手が回らず、何のノウハウもなかったことから、３年近く経った19年４月になってやっと創刊号を発行することが出来ました。

まず取り掛かったのは広報誌のネーミングですが、「いぶりに住む（ＬＩＶＥ）」を短縮して「いぶりぶ（ＩＢＵＬＩＶＥ）」と名付け、発行は４月（春）・７月（夏）・10月（秋）・１月（冬）の年４回の「季刊誌」としました。

創刊以来、表紙を飾る連載企画は「坪院長の健康講座」とし、専門病院らしい内容と、坪院長のテンポ感ある文章により、当院を利用される患者様に愛読されています。設立間もない病院として、当初はスタッフの紹介を中心に紙面構成、職員のプライバシーに配慮しながらも人柄や趣味などを紹介し、患者様との距離感を取り除くことができたのではないか？と思っております。早いもので創刊から８年、本号が32号となります。これまでお力添え頂きました皆様に心より感謝申し上げます。

地域の病院からも広報誌はたくさん送られて来ますが、当院のような単科のクリニックでは収集出来ないような充実した豊富な内容で、何時も感心させられています。

試行錯誤を重ねながら何とか８年間発行を続けて来ました。内容も目新しいものはありませんが、当院の情報を出来る限り患者さまや地域に伝える所存でおります。また患者様が参加できる紙面構成なども考え、投稿作品などの掲載も実現できれば良いかなと、あれこれ思案しております。今後とも努力していく所存ですので、変わらぬご愛読とご協力をお願い申し上げます。

いぶりぶ発行委員会　発行責任者　横井　浩

■発行：いぶりぶ発行委員会　伊達市梅本町2番地15いぶり腎泌尿器科クリニック内　TEL0142-21-1400　FAX0142-21-1401
■発 行/平成27年1月10日■4月・7月・10月・1月の年4回発行

※本誌掲載の写真、記事の無断転用は固くお断り致します。
●発行責任者：横井　浩

万が一の緊急時に備え 消防訓練を実施

昨年10月16日、万が一の緊急時に備える消防訓練を実施しました。火災発生時に適切かつ迅速な対応を組織的に行うことを目的実施しています。

訓練では避難と消火器による消火訓練を重点的に実施、職員合わせて25人が参加し、消火器の扱いや避難経路の確認を行いました。

消化訓練では実際に消火器を操作し、緊急時に慌てず操作が出来るよう、真剣な表情で訓練に臨んでいました。

透析室の忘年会を昨年開催しました

毎年恒例となった透析室の忘年会を、昨年12月14日に開催いたしました。

会場は伊達市内のホテル・ローヤル、透析室を利用され貴恵子看護部長のあいさつで幕開けした会は、カラオケやゲームを楽しみながら進行、昨年1年を振り返りながら、楽しいひと時を過ごしました。

患者様と病院スタッフとの垣根を越える交流は、今後も継続し、相互理解を深めていきたいと考えております。

竹内豊副院長、今当院スタッフの交流を深める目的で開催しています。

新人さん紹介

よろしくお願いします

病棟看護師　小林めぐみさん

今年1月から仲間入りした小林さんは旧・虻田町の出身で、「生まれてから現在まで、ほぼ地元暮らし」という、生粋の〝虻田っ子〟だ。地元の小・中・高を経て伊達市内の看護学校へ進学、中学生の頃「自立した女になりたい」と目指した看護師への夢を追った。

「専門病院での看護は初めての経験、早く皆さんのお役に立てるよう精いっぱい頑張ります」と戸惑いながらも前向きに動き回っている。趣味は友人と行く旅行で、旅先は首都・東京が多いとか。「旅行というよりはショッピングが目的かな」と女性らしいコメントも。

「今は勉強を重ね、専門病院で必要な知識を吸収し、患者様とご家族から信頼されるようになりたい」と真剣な表情を見せ、新しい環境への順応を目指している。

看護倫理研修会実施

倫理的感受性を深める
基本的要素に理解

看護部長　今　貴恵子

自らの行動を律する職業倫理規定を有することは、あらゆる専門職の最も重要な条件の一つといえます。特に生命の「安全」に係わる医療現場においては、その重要性を常日頃から認識していくことが欠かせないのです。

いぶり腎泌尿器科クリニックではこの観点から「看護倫理研修」を開催しており、直近では昨年10月26日にカルチャーセンター視聴覚室にて当院の看護師を対象に実施しました。テーマは「臨床での倫理的看護実践の考え方と倫理問題の展開」で、講師は北海道医療大学・看護福祉学部看護学科の神田直樹先生にお願いし、看護倫理に対する理解を深めました。

研修では「難しい」「とっかかりずらい」という負のイメージを払拭し、無意識のうちに自然に、しかも日常的に行われるもの―、という指摘を受けました。その例として患者様援助の場面で感じる疑問、ジレンマにまずは気づくことから始まり、さらに重要なことが「倫理的感受性」を高めること、倫理的問題を捉える能力・観察力を高めることなど、まさに日常業務の中にポイントがあると結論されました。

この研修から直感的に判断（思い込み）するのではなく、家族様など関係する人らの思いや価値観を理解尊重したうえで、倫理原則から考えチームとして意思決定をするプロセスが重要であること、看護チームとしてのケア提供を考え実践することが必要と実感しました。また、導き出した結論については関係する人々が理解できる経過が重要と感じました。

実際に事例検討を通し、倫理問題を検討するための視点や考え方ツールを活用し問題整理をしていくことを学びました。

今後さらに倫理についての学びを深め、必要なスキルを身につけ磨いていかなければと感じました。まだまだ課題はありますが研修で得たことは、これから当院の看護の在り方を見直すきっかけになり、これはどんな意味があるのかと考えることにつながっていくと思います。

倫理とは常識・良識であり、相手の人格を十分尊重し、大切にする姿勢で臨み、医学的な観点ばかりではなく、人の人生全体をみる視点で、患者様にとっての「最善」を目指す、倫理的看護実践を実現させる看護師でありたいと強く思いました。

column コラム 待合室 No.32

本屋さん

○…筆者は小学生から中学３年の秋まで、室蘭市本輪西町で暮らしていた。当時は栗林商会や日本石油の城下町的な所で結構にぎわっており、商店街も小さいながらそれなりに活気があった。中学生の頃、クラシック音楽に関心を持ち、仲の良い友人たちと音楽の話をするのが何よりの楽しみだった。

○…当時はベートーベンやモーツアルトなど、巨匠の作品を扱った「ミニスコア」を書店で販売していた。それを買い、レコードを聴きながら楽譜を目で追いかけ、作曲家の想いを想像するのが至福の時間であった。とはいえ、中学生の小遣いでは中々買えないレコードとスコア、大概はマチの本屋さんで立ち読みするのが日課だった。

○…そのうちに楽譜を書き写す「写譜」が、「理解が深まる」と仲間内で流行る。必要な五線紙も書店で扱っていたが、12段のものしかなく、物足りない思いが生まれた。が、ある日24段の五線紙が書店に並んでいた。当時は何も感じなかったが、今考えると「あれは商売抜きの店主の心意気だろう」という思いが強い。

○…漫画の立ち読みは掃除に託けた「ハタキ攻撃」で撃退されたが、スコアに関してはある意味自由だった。24段の五線紙も、中学生の会話を聞き入れた店主の心憎い「配慮」だったのだろう。その書店が昨年、「文部科学大臣表彰」を受けたという新聞記事を目にした。なにか不思議なホッとした安心感で心が満たされた。

○…砂川市のいわた書店は「1万円選書」というユニークな取り組みで話題になっている。「妻に先立たれた心の隙間を埋める本を…」など、1万円の予算で希望を満たす選書を届けるサービスが口コミで広がり、全国から注文が殺到しているという。これも儲けを先行させた試みではなく、〝仕事〟に誠実に向き合った結果だろう。

○…大げさに言えば、経済活動の原点は〝心〟にある。本屋さんも大手資本には勝てずマチから姿を消していく現実もあるが、この原点を忘れない〝心意気〟が大切なのだ。結果が全てで、数字第一主義の社会になってしまったが、人間らしく生きたい願いは消えはしない。数字に偏った〝信〟を問う選挙があったりしたが、いま問うべきは〝心（しん）〟の方だろう。豊かさの本質は何か？数字や経済優先ではないことは確かだ。その本質の向こうに、地方創生があることを信じていたい…。

悩みは万病の元
その悩みひとまず
弁護士へ
無料法律相談
※秘密厳守

当院の顧問弁護士が、悩みの相談に応じます。
悩みを引きずらず、思い切って相談してみましょう！
借金・債務整理　相　続・遺　言
交通事故　離婚問題
etc.
担当弁護士　上田　勝啓（札幌弁護士会所属）
■相談無料■
●ご希望の方はお気軽に当院の横井事務長までご一報ください。
0142-21-1400(代)